



熊田先生の川柳教室

これが川柳だ

短歌と俳句

ちはやぶる

神代も聞かず

竜田川

からくれないに 水くくるとは

(この句を詠んだのは在原業平といわれている)

このように、五・七・五・七・七の31音からなっている歌を短歌といつて、
俳句は、短歌の31音の上半分の五・七・五の17音だけが独立して、つくられるよう
じつはこれが、川柳のご先祖さまなんだ。

千年以上続く短歌から、江戸時代に俳句が生まれた。
俳句は、短歌の31音の上半分の五・七・五の17音だけが独立して、つくられるよう
になつたものだ。

俳句の特徴

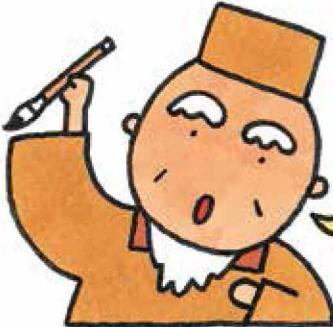
閑さや 岩にしみ入る 蝉の声



松尾芭蕉

この句の季語は蝉。
夏の季語じゃ

俳句の特徴は、季語（その句の季節を表すために決められたことば）
を必ず入れるということ。
右の芭蕉の句では、蝉が夏の季語だよ。
短歌がご先祖さまなら、俳句は川柳の兄弟ってところかな。
ちなみに、芭蕉が生きていた江戸時代には俳句とすることばはなかつ



た。俳句と呼ばれるようになったのは、明治時代になってからで、命名したのは正岡子規なんだよ。

川柳とは

川柳も五・七・五の17音つていうところは、俳句と同じだ。

だけど、川柳には季語は入れなくてもいいんだ。

だから、俳句よりも気軽につくれるよ。

川柳は、どんなことでも自由に詠んじゃえばいいんだけど、そのなかに、ユーモアや風刺（世の中の悪いところや人の悪いくせなどを、それとなく、からかったり、ひにくつたりすること）なんかが入つていたりすると、おもしろいね。



川柳という呼び名は、柄井川柳（柄井八右衛門）という人から名づけられた。

柄井川柳（一七一八～一七九〇年）は江戸（今の東京都）の浅草で、今までいう村長や町長のような役目をしていた名主の家に生まれた。

柄井川柳は「川柳」のもととなつた「前句付」の「点者」だった。「前句付」というのは、まず、七・七の「前句」と言われる「お題」をつくり、それに合う五・七・五の「付け句」を付けるというもの。「前句」に「付け句」を付けるので「前句付」といった。そして、この「付け句」のなかから良いと思うものを選ぶ人のことを「点者」と呼んだ。

この「点者」の中で最も人気があつたのが柄井川柳で、彼が募集し、たくさんのが「付け句」の応募があつたのが「万句合」だった。応募数は一万を超えていたという。そして、「万句合」が始まってから数年後に、入選作から優れている句を選んでまとめた「誹風柳多留」が出版された。この本が大人気となつたため、柄井川柳の名が高まつた。

このことから、「前句付」のおもしろい「付け句」のことを「川柳」と呼ぶようになった。